

## 「ヤロスラフリーの水呑み百姓」

文字通り細々とはあるが、ここ一〇年ほど私はロシアの地域史を調べている。というよりも地域史研究の歴史を調べていると言うのが正確なのだが、それでもあのように大きな国だから、幾つもの州（かつての県）というわけにはいかない。せいぜい二、三の州に限られ、それも帝政時代から間欠的に纏められてきた地誌や郷土史のたぐいを手に入れて読むという程度のことである。とはいえこうした作業が出来るようになったのも最近のことで、ソヴィエト時代は容易なことではなかった。ソヴィエト体制の崩壊後のロシアでは歴史の「見直し」「読み直し」が進められていることについては多くの紹介があるが、いま地域とその

## 土肥 恒之

歴史に目を向ける動きが生まれている。つまり革命によって断ち切られた地域史研究の伝統が復活して、例えば「往古、昔」を意味する「スタリナー」というタイトルを掲げた雑誌が各地で刊行されているのである。つい最近出たベルディンスキフという若い歴史家の『郡の歴史家たち』という本は、帝政ロシアの郷土史家についての大きな、しかも大変魅力的な研究である。

ところで私がいま関心をもつて文献を集めているのはヴォルガ上流の古都ヤロスラヴリを中心とするヤロスラフ州に関するものである。ヤロスラヴリはモスクワよりも古い都市で、一七世紀にはロシア第二の人口を誇る商業

都市であった。この都市と州の歴史について最近幾つかの興味深い出版物が出ているのだが、一九九四年には『ヤロスラフスカヤ・スタリナー』という雑誌が刊行され、すでに数字に及んでいる。実はこの雑誌の創刊号のコピーを手に入れたのは最近のことなのだが、そのなかに「商人エリセーエフ家の家系について」という二ページ足らずの小さな報告が掲載されている。この報告に目が止まったのは、他でもない、エリセーエフは知る人ぞ知る、日本とも因縁浅からぬロシア人の名前だからである。ではどういう因縁なのか、その辺から話を始めることにしよう。

大正一〇年、つまり一九二一年の七月から『大阪朝日新聞』で「赤露の人質日記」という連載が始まった。ロシアの「十月革命」の三年余り後のことである。言うまでもなく世界を揺るがした「労農革命」ではあるが、当時のこととして国内の確かな状況がよくわからならない。「人質日記」はそのタイトルから明らかなように、「革命」に批判的な立場から書かれたものだが、大いに好評を博し、一〇月末には単行本として出版されたのである。この本の著者がセルゲイ・エリセーエフという日本文学研究者であった。彼はペテルブルクに本店がある高級食料品店「エリセーエフ

兄弟商会」の次男として一八八九年に生まれた。エリセーエフ家は食料品店だけでなく、銀行などさまざまな経営活動に参加しており、政治にも発言力を持っているロシアの大ブルジョアであった。つまりセルゲイはその「商人エリセーエフ家」の直系、大富豪の御曹司ということになる。だが彼は実業界に進むことはなかった。「唐様で貸家と書く三代目」とまではいれないが、たまたま父親に連れられて訪れたパリの万国博覧会で日本館、中国館で「なまの東洋文化」に触れて、魅せられたのである。一九〇〇年、彼が一歳のとぎのことである。ペテルブルク大学にも東洋学部があったが、彼はベルリン大学付属の東洋語学院を経て、日本へ留学した。一九〇八年秋「英利世夫」という入学願書を帝国大学に提出したのである。彼は文字通り語学の天才で、日常会話についても見るみる間に上達し、山形は米沢の出でズーゾー弁の女中に「通訳」を頼まれるほどになったという。卒業論文は芭蕉で、優秀な成績で卒業した。その後も漱石門下と交わるなど、幅広い交友で知られた。男前で、人当たりもよい「碧眼の外国人」は寄席で落語を聞き、日舞を習い、そして新橋で芸者遊びもしたという。こうしてエリセーエフの日本滞在は足掛け七年に及ん

だ。

エリセーエフが帰国したのは大正三年、一九一四年のことである。サントペテルブルク大学の私講師に採用された彼は、東洋学部の日本語科で日本語と日本現代語を講義した。また結婚をして家庭人ともなったのだが、折悪しく第一次大戦が勃発して、ロシアも参戦した。そして運命的な一九一七年がやって来た。大方の知識人と同じように、彼はロマノフ王朝を打倒した「二月革命」には喝采の声を挙げたが、急進派のポリシエヴィキの「十月革命」には絶望した。エリセーエフ家の膨大な財産は没収され、一家の運命は風前の灯火ということになった。かつてロシアで一、二を競う大富豪の家でも、ろくに食事が出来ないような日々が続いた。セルゲイは家族四人での亡命を決意して、必死のロシア脱出を図った。ヘルシンキを経てパリに入ったのが、一九二一年二月のことであった。こうして亡命生活が始まった。

エリセーエフは、亡命の翌々日にシャンゼリゼ通りで帝大での旧知の友人に出会い、程なくして朝日新聞のパリ特派員から「革命体験記」を依頼された。こうして誕生したのが、『赤露の人質日記』であった。翻訳ではなく、エリ

セーエフが自ら全文日本語で書き下ろしたものである。パリの亡命生活は決して楽ではなかったが、『日本と極東』という日本紹介を目的とした雑誌を編集し、自ら多くの小説をフランス語に翻訳して掲載した。一九三〇年にはソルボンヌの高等研究院の講師に任ぜられた彼は、夫人とともにフランスに帰化した。四〇歳を過ぎて、ようやくパリの生活は曲りなりにも軌道に乗ったわけだが、そこにハーヴァード大学に新設される東洋語学部の学部長に就任してほしい、という話が舞い込んだ。あまり気乗りはしなかったが、「背に腹は変えられない」。つまり受け入れ条件は悪くなかったのである。かくて激動の第二次大戦を挟んで実に二三年にわたって、アメリカで日本研究の教育と研究者の養成に努めた。彼の下から多くの優れた学者が育っていったが、一九六一年から日本大使を勤めたエドウィン・ライシャワー（一九一〇—一九〇）もその一人である。ライシャワーは師を「アメリカにおける東洋学の父」と称えている。「日本学」でなく「東洋学」なのは、エリセーエフが中国の言葉と文化にも通じていて、教育に当たったからである。

一九五七年パリに帰ったエリセーエフは高等研究院の仕

事を再開したが、七〇歳をこえるときさすがに身体の方も弱ってきた。そんな彼を喜ばしたのは日本政府から勲二等瑞宝賞を贈られたことであつたが、一九七五年四月ついに帰らぬ人となつた。亡骸はパリ郊外のロシア正教会の墓地に埋葬された。こうしてセルゲイ・エリセーエフの波乱に富んだ一生は終わりをつげたわけだが、その晩年に倉田保雄という共同通信のバリ支局長が隠居生活を送っていたエリセーエフを訪ねた。とつつきにくいインテリ老人を予想していたところ、いきなり「先日はお電話を頂きましたが、ちょうど風呂をとつておりましたので、武士はフンドシをつけずに電話に出ては失礼かと思ひまして」と言う挨拶が返つてきて、調子が狂つてしまつたという。エリセーエフに魅せられた倉田はこの人物について伝記を書くための調査を始め、『エリセーエフの生涯』（中公新書、一九七七）にまとめられた。以上の紹介もこの本によつていゝるが、倉田はそれに先立つて、半世紀ぶりに『赤露の人間日記』を再刊（中公文庫、一九七六）したのである。

さて前置きがなくなつたが、エリセーエフは倉田との心おきな会話のなかで、祖先については「私の曾祖父の代はまだヤロスラフ（ハロスマ)で水呑み百姓でしたが、私が生ま

れたときはもうロシアの富豪エリセーエフでした」と語つたという。「ヤロスラフの水呑み百姓」。この個所を読んだとき、私はすぐに百科事典で調べてみた。確かに「商人エリセーエフ家」の草分けはヤロスラフの農民で、名前はピョートル・エリセーエフという。生まれは一七七五年、「農奴」だつたが、解放金を支払つて「自由」を手に入れた。そして一八一三年にはじめてペテルブルクに小さな店を出し、外国のワインや果物を扱うことで繁盛したのだが、この「曾祖父」の出自についてそれ以上の具体的な言及はない。私は一〇年ほど前のモスクワ滞在のときに二、三度トヴェーリ通りにあつたかつてのモスクワ支店（二九〇一年開店）に立ち寄つたことがあるが、大きなシャンドリアを吊した豪華な店であつた。そうこうするうちにエリセーエフの件は忘れていたのだが、たまたま去年手に入れた雑誌に、最初に言及した小さな報告が掲載されていたというわけである。

さて「商人エリセーエフ家」の草分けであるピョートルについては、よく知られた定説がある。それは彼が当時ロシア最大の領主であつたシェレメーチエフ伯爵の「農奴」であつたというもので、先の事典の指摘もそれに基づくも

のと思われる。シエレメーチェフは古い貴族だが、一八世紀初めのピョートル改革時代に台頭して、その後婚姻などを通じて領地を大きく拡げた。世紀末の段階で全国一七の県に男女約二万人の農民を抱えていたというから、文字通り大領主であつた。この数字は優に一つの大都市に匹敵する規模だが、ロシアの貴族の領地は、ほとんど例外なく全国に分散していた。もちろん中心となる大領地があり、また夏に別荘に使う領地もあつた。なかには「アジアのような」遠い地方にあるために、地代が送られてくるだけで当主が一度も足を運んだことのない領地もあつたのである。シエレメーチェフ伯の場合も一七県に分散していたわけで、そうしたロシアの領主の典型とみることができ、そして彼はヤロスラフ県にも広大な領地を抱えていた。この領地の村と農民については個別の研究も出ていて、多くが常に出稼ぎに出ていることも明らかにされている。出稼ぎには、領主の許可とパスポート、つまり名前と身体上の特徴を記した国内旅券が必要だつたから、史料的には人数まで押さえることができる。大都市ペテルブルクはヤロスラフ領地の農民にとって、格好の出稼ぎ先であつたのである。

そこでピョートル・エリセーエフだが、今回の報告によると、彼の村は確かにヤロスラフ県ではあるが、シエレメーチェフの村でも彼の「農奴」ではなかつた。ノヴォセルキ部落という村の生まれで、この村はかつてロストフ郡のスパソ・ペツキー修道院の領地であつた。ところが女帝エカテリーナの時代に実施された修道院領の世俗化政策のために、「経済省」が設けられて国の管理に移された。つまり農民は聖界領主の手を離れて、国有地農民と同列の扱いとなつたのである。ではどうして「農奴」伝説が生まれたのだろうか。可能性としては、ノヴォセルキ部落が伯の領地に「隣接していた」ことが指摘されているが、本当のところは分からない。

こうしてピョートル・エリセーエフがシエレメーチェフの「農奴」というのは根拠のない伝説であつたが、ここから「自由」の買取りというもう一つの定説も当然疑わしいものとなる。確かに一九世紀初めのロシアでは、農奴制の緩和策の一環として、農民による「自由」の買取りが認められていた。けれども実際には莫大な「買戻し金」が求められたり、主人の「恣意」によって取り消されたりで、法の運用はデタラメであつた。もちろん実例はあつた。シエ

レメーチェフ領のなかにも、「繊維工場」を営み莫大な富を手にした「農奴企業家」ガレリンのように、高額な「買戻し金」を支払って、「自由」になったものがいた。またどんなに高額な解放金でも同意しなかった主人が、朝食のための「牡蠣の小樽」と引き換えに解放書にサインした、といううそのような実話も伝えられている。そこでピョートル・エリセーエフだが、彼の場合もよく似た話が伝えられている。つまりある冬の祝祭日のこと、彼がシエレメーチェフの客人を新鮮なオランダ・イチゴでもてなしたところ、主人がいたく感激して、解放書にサインしたというものである。なるほど彼は「マロース」、つまり冬の寒い日々に温室でイチゴ類を栽培する園芸農家であつて、そうしたことから隣村の旦那であるシエレメーチェフに取れたての極上のイチゴを献上することがあつたかも知れない。けれどもこの話にも根拠がない。そもそも「農奴」ではなかつたのだから、「自由」を買い取る必要もなかつた。かくして「農奴」、そして「自由」の買取りという通説は誤りで、件の百科事典も書き改めなければならないのである。

ところで以上のような通説の誤りが判明したのは、ノ

ヴォセルキ部落が属したヤコヴツェヴォ村の教区教会について信徒に義務付けられていた告解の記録が残されており、そこにエリセーエフ家の名前が認められたからである。つまり一八一一年の記録によると、家長エリセイ・セミョーノヴィチ（正確には「セミョーノフの息子」）、妻ペラゲヤ、そして三人の息子イグナチー、ピョートル、そしてヴァシーリイが、更に未亡人の姉の名前が見える。この二番目の息子ピョートルがこれまで述べてきた人物で、よくあるように父親の名からエリセーエフ姓を名乗つた。彼がセルゲイの「曾祖父」である。けれども「水呑み百姓」であつたわけではなく、セルゲイのことだからおそらく卑下してそう呼んだのだろう。抜け目ない商売で財を築いたピョートルはその後正式に「商人」身分へ移り、村を去り家族全員をペテルブルクに連れて行つた。そしてここでの商売に専心したが、一八二五年に亡くなつてゐる。跡を継いだのが二人の息子で、彼らが一八五八年ネフスキー大通りに「エリセーエフ兄弟商会」を設立したのである。エリセーエフ家とヤロスラーヴリとの縁は、これによつて切れたように見える。けれども彼らは自分たちの小さな故郷を忘れることはなかつた。というのは彼らはあの教区教会の

ために多額の寄付を惜しまなかっただけでなく、この町に作られた信仰団体のメンバーとして最も多額の寄付をしたのもエリセーエフ一族の面々であったという。

以上がヤロスラーヴリの古文書館での調査の結果明らかにされたことのすべてである。この報告はある無名の地域史家による「面白い事実」、エピソードの発見にすぎないように見えるが、こうした点にさえロシアの歴史学の現状を読むことができる。つまり一方での地域の歴史に対する熱意があり、そして他方での「ブルジョア」、つまりロシアのビジネス・エリートとの歴史についての強い関心である。かつて共にネガティブな評価の下にあったわけだが、そうした問題がいままさに脚光を浴びているのである。

そして最後にヤロスラーヴリと日本との繋がりについてもう一点、是非想起しておかなければならないことがある。『岐路に立つ歴史家たち』（山川出版社、二〇〇〇）という本でも書いたように、同じく日本学者で、エリセーエフより三歳下のニコライ・ネフスキー（一八九二—一九四五）もまた、ヤロスラーヴリの出であったという「興味深い」事実がある。彼は生まれ育ちもここで、生家は農民ではないが、エリセーエフとは違って貧しかった。亡命の道

を選ばなかったネフスキーは、ラーゲリで悲劇的な死をむかえたのである。かくてロシアの日本研究において名を成した二人のロシア人が、揃ってヤロスラフ地方と関わりをもっていたことになる。もとより偶然で、偶々というより他はないが、こうした「発見」もまた地域史研究の愉しみの一つと言えるのではないだろうか。

（どひ つねゆき・一橋大学大学院社会学研究科教授）